

★ ★ ★ ★

午後からペペはクラウディオ エルミタスの家に招待の確認のため電話を掛けた。全て正常であった。パーティーは10時から始まる。スシは身支度のため、午後の中ごろ（午後6時頃）から姿を消した。ペペは9時にホテルのバルで待った。彼女が到着した時、彼女と分からなかった。黒の襟ぐりの大きいドレスに金色のショールを掛け、すごい美人になっていた。

—どうしたの？ボス、私、素敵でしょう？

—良い？素晴らしいね！とペペは言った。借り物なのだが、上等のタキシードを身に付けたペペは、それほど身にしっくりせず、とても着心地が悪く感じていた。

—君はとても似合っているよ。事務員よりとても良い。

★ ★ ★ ★

車に乗ると歌手の別荘の方に向かった、素晴らしいプライベートビーチ、広大な庭の中に大きな別荘があった。家は“ビラ ブランカ”と呼ばれていた。“何と気取った！”とペペは考えた。入口の前で、もうそこに居るのが嫌になり始めた。辺りに高い松の木が続いている一本の道を運転して庭まで行った。そこで歌手の運転手の一人が、車を止める処を指示した。もう招待客で一杯だった。豪華な車が何台も駐車していた。庭はイルミネーションが輝き優雅な音楽が流れ、全ての場所に多くの人達がいた。ある人達はヨットで到着し歌手の持っている小さな港に錨をおろしたところだ。沢山の人の中で少し我を忘れた。ペペとスシはどうするか分からなかった。一人の給仕が飲み物とカナッペの注文を取りに来た。数分経つと彼等にアルツウロ サクリスタンが挨拶に来た。

—君たちが楽しく過ごされることを期待していなす。もし何か必要なことが有りましたら、私に言ってください。

—有難うございます。